

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770055

研究課題名(和文) 日本および東アジアの人形燈籠(lantern)制作技法の比較分析

研究課題名(英文) Comparative Analysis of the Production Techniques of lantern made in Japan and east Asia

研究代表者

三浦 俊一(MIURA, Syunichi)

弘前大学・大学院地域社会研究科・客員研究員

研究者番号：30633143

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本および東アジアで制作されている人形燈籠(lantern)における制作プロセス、制作の担い手、社会的背景を明らかにし、その研究成果をもって、地域間交流の契機とすることを目的として、実地調査による観察および聞き取り調査とその後の比較分析という方法によって実施された。

本研究の比較分析によって、日本と中国・台湾の人形燈籠の制作技法やその社会的背景など共通点および相違点が明らかとなった。また、シンポジウムでの事例紹介や研究報告の中国語への翻訳によって、相互の文化的な地域間交流の起点となった。

研究成果の概要(英文)：This study was done in order to better understand this lantern made in Japan and east Asia, how it is made, the people who make this lantern, and their role in society. This study allows us to better understand the other countries that make this lantern.

We conducted this study through observation, survey, and comparison. Due to this study, we can better understand the similarities and differences between China's, Taiwan's, and Japan's version of this lantern. Through symposium's (a kind of meeting) introduction and through the reporting of this study that was translated into Chinese, we were able to better understand the countries that make this lantern's culture.

研究分野：芸術学

キーワード：人形燈籠(lantern) 立体造形 制作技法 都市祭礼 花燈 ねぷた 東アジア 地域間交流

1. 研究開始当初の背景

本研究で対象とする人形燈籠 (lantern) と呼ばれる立体造形は、一般的には竹材や針金などで骨組を作り、内部に照明を設置し、表面に紙や布を貼りつけ、着色をしたものを指す。立体造形としての人形燈籠 (lantern) の特徴として、以下の点が挙げられる。

-) 立体を形成する材料が、粘土や木材といった三次元の材料ではなく、竹材や針金といった線の材料つまりは、擬似的ではあるが一次元の材料と、紙や布といった面の材料つまりは二次元の材料を組み合わせて立体を構成する。
-) 外側からの照明ではなく、内側に設置された照明によって鑑賞する。
-) 内部照明によって、発光体の特性を有するため、墨や口金を併用して着色する。
-) 発光体の特性により、形状の起伏や凹凸が認識しづらいため、特有のデフォルムを施す。

また、様々な地域で制作される人形燈籠 (lantern) は、その地域の祭りのシンボルとして制作されることが多く、職業的技能者に加えて、無償のボランティアな担い手も多く制作に参加している。また、その祭りの歴史の変遷の中で、「穢れ祓い」の習慣との接点を有する場合、祭り終了時に燈籠が解体されてしまうことも多い。これらのことを理由に、このような人形燈籠 (lantern) の制作技法は、日本各地および東アジア広域に存在するものの、立体造形としての詳細な技法分析の前例がない。

人形燈籠 (lantern) に関する先行研究は、それがシンボルとして用いられる祭礼行事自体を社会学の視座から論じたものは多くあるものの、芸術学の視座から、その制作技法を分析したものは、管見では見当たらない。

申請者は、ねぶた・ねぶたと呼ばれる人形燈籠が制作される青森県津軽地方の出身であり、幼少時よりその制作に携わってきた経験を有する。また、青森県弘前市で毎夏行われる弘前ねぶたまつりにて、人形ねぶた制作の指揮を執るねぶた組師を、1997年より現在までの16年間にわたり務め、20台以上の人形ねぶたを制作してきた。(2005年から現在までは、中川俊一という作家名を用いている。) さらに、これらの制作実践に加え、申請者はこれまでに、ねぶた・ねぶたの技法の教材開発(三浦2007)や、ねぶた・ねぶたの制作技法の分析(三浦2011、2012)、青森県津軽地方のねぶた・ねぶたと青森県下北地方の燈籠山車との比較(三浦2012)を行い、その研究成果を論文にまとめている。

本研究において、芸術学の視座より、人形燈籠 (lantern) の技法分析と地域間比較が進められることにより、その制作技法が広く認知され、制作技能の継承への貢献が期待できると考える。

2. 研究の目的

本研究は、日本各地および東アジアにおいて作られている人形燈籠 (lantern) の制作技法を、申請者のこれまでの青森県津軽地方におけるねぶた・ねぶたの制作実践と分析を基に、比較分析するものである。具体的な目的は以下である。

- (1) 人形燈籠 (lantern) の制作プロセスを詳細に調査し、技法を明らかにする。
- (2) 人形燈籠 (lantern) の制作がどのような担い手によって行われているかを明らかにする。
- (3) 人形燈籠 (lantern) 制作の背景に、どのような地域的特色が存在するかを明らかにする。
- (4) シンポジウムの開催、複数の言語による報告書作成により、地域間交流の機会をつくる。

3. 研究の方法

本研究では、人形燈籠 (lantern) の制作技法およびその担い手や地域的特色との関連を明らかにするため、直接、現地におもむき観察を行い、制作関係者への聞き取り調査を実施した。この実地調査は以下の地域において実施した。

-) 中国上海・上海豫園新春芸術灯会
-) 台湾南投県・台湾ランタンフェスティバル2014
-) 台湾台北・台北ランタンフェスティバル2014
-) 日本長崎県・長崎ランタンフェスティバル2014
-) 日本青森県・箭根森八幡宮祭典
-) 中国珠海・林健兒氏制作工場
-) 台湾高雄・黄文全氏制作工場
-) 台湾平溪・平溪天燈祭
-) 台湾台中・台湾ランタンフェスティバル2015
-) 台湾台北・台北ランタンフェスティバル2015

また、青森県弘前市で2015年9月に、弘前ねぶた参加団体協議会の主催によって行われた「組ねぶたシンポジウム」に計画段階から参画し、シンポジウムにて中国・台湾の花燈について事例紹介を行った。

さらに、本研究の報告書は中国語に翻訳され、中華花燈藝術學會を通して、中国・台湾の制作関係者に報告された。

効率的に研究を進めるための研究協力者として、弘前大学教育学部美術教育講座の教員や院生の支援を得た。また、申請者がこれまでの制作実践によって得た、津軽地方のねぶた・ねぶたなどの人形燈籠 (lantern) 制作技能者の人的ネットワークを活かして、研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 制作プロセス

制作される題材では、人形ねぶたが「勇ましさ」を表現する事例が多いのに対し、花燈では新春を祝う「縁起物」を表現する事例が多いことが明らかになった。

骨組の制作では、材料や固定方法の違いを整理した。また、デフォルメを人形ねぶたでは多用するのに対し、花燈では写実的な表現を重視し、デフォルメをあまり用いないことが明らかになった。さらには、針金のねじれをコントロールして流線的に骨を組む技法を、花燈の方がより多用することを特筆した。

内部照明の設置では、材料の類似点を整理した。一方で、LED 照明ケーブルの設置個所と、「点滅」表現の効果については、花燈の固有の表現であることを特筆した。

表面の貼り付け材料では、人形ねぶたが和紙、花燈が布材であるという違いが、他の作業工程にも大きな影響を与えていることを指摘した。

彩色では、用いる塗料の違いを整理した。特に、墨つまり黒色を人形ねぶたでは多用し、明暗のコントラストを強調していることを明らかにした。

また、台座の有無や、防水加工の進化の違いについても明らかにした。

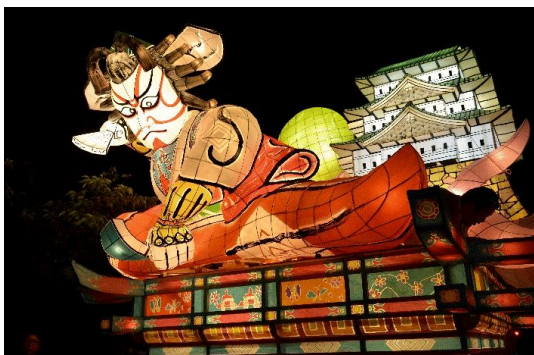


図1. 津軽地方の人形ねぶた
(2015年 研究代表者制作)



図2. 津軽地方の人形ねぶた

(2011年 研究代表者制作)

(2) 担い手

制作の担い手については、日本および東アジアの両地域において、制作を総括する中心的担い手が人形燈籠制作を専業で生業としているが、それ以外の担い手については専業ではなく、他の仕事と兼業で従事している事例が多いことが明らかになった。また同時に、両地域において、職業的な行為としてではない、無償のボランティアによる人形燈籠制作の事例も存在することが明らかになった。

(3) 地域的背景

「ねぶた」という言葉が書物に初めて登場するのは、弘前藩庁『御国日記』の享保七年(1722)の七月六日のものであり、この時代にはすでに燈籠が作られていたことがわかっている(藤田 1976)。これ以前の資料は見つかっていないが、この祭事は、日本各地に見られる眠り流しという習慣から派生したものであると考えられる。穢れ祓いのための水浴の後、水に流されたなにかが燈籠へと進化し、次第に流す行為よりも街中を練り歩く行為に、重点が移っていったものと考えられている(柳田 1936)。ねぶた祭りは、古来の眠り流しという年中行事を基に、都市の祭事として進化し、歴史を積み重ねてきた(池上 1986)。

一方、元宵節に「花燈」をかざるという習慣は、前漢の7代皇帝である武帝(在位:紀元前141~87)が「泰一神」という神格を祀った祭祀を行ったことが起源となっているという。その後、後漢の2代皇帝である明帝(西暦57~75)が、仏教を広めるため「燃燈表佛」を行い、これを広く公開して民衆に観賞することを許可した。このことを契機に、元宵節に「花燈」を飾ることが広く民衆に広がったという。

その後、唐、宋の王朝時代には、皇帝の庇護のもと、より豪華なものが作られる様になり、宋王朝以降、中国全土各地に、その文化が広がったという。

両者の歴史的背景から、現代の文化において大きな違いが生じている。それは、「ねぶた」が街中を練り歩く「運行」という形態であるのに対し、「花燈」は運行されることはなく、一か所に据え置かれ「展示」される形態をとっているという点である。

(4) 地域間交流

地域間交流の手段として、研究計画では国際的なシンポジウムの実施を考えていたが、中国・台湾の制作の担い手の方々の訪日の調整が困難であることなどから、計画を変更した。シンポジウムについては青森県弘前市において、平成27年9月に「組ねぶたシンポジウム」が実施された際、研究代表者は計画段階から参画し、コーディネーターを務め、中国や台湾の制作事例を講演する機会を得

た。また、本研究の成果は中国語にも翻訳され、中国や台湾の制作の担い手の方々には中華花燈藝術學會を通して報告された。

<引用文献>

柳田国男「眠流し考」1936『定本柳田国男全集』第十三巻 筑摩書房 1963

藤田本太郎『ねぶたの歴史』弘前図書館後援会 1976

弘前大学人文学部人間行動コース『ネブタ祭り調査報告書 文化・社会・行動』弘前大学 1986

池上良正「ネブタの文化」1986『ネブタ祭り調査報告書 文化・社会・行動』弘前大学 1986

笹森建英『津軽ねぶた論攷 黒石《分銅組若者日記》解』黒石青年会議所 1995

劉俊哲・植田憲・宮崎清「中国・南京における伝統的灯籠「秦淮灯彩」の成立と発展」2012『デザイン学研究』第59巻第3号通巻213号 日本デザイン学会 2012

劉俊哲・植田憲・宮崎清「伝統的「秦淮灯彩」の社会的・文化的役割」2012『デザイン学研究』第59巻第3号通巻213号 日本デザイン学会 2012

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

三浦俊一、津軽地方の人形ねぶた制作技法の分析 台座部分の制作について、芸術文化、査読有、第18号、2013、pp. 13 - 19

三浦俊一、津軽地方の「人形ねぶた」と中国・台湾の「花燈」の制作技法の比較分析、芸術文化、査読有、第19号、2014、pp. 15 - 24

三浦俊一、発光する立体造形の特性に関する分析 津軽地方における人形ねぶた制作技法を中心事例として、芸術文化、査読有、第20号、2015、pp. 29 - 39

〔学会発表〕(計 4件)

三浦俊一、津軽地方の人形ねぶた制作技法の分析 台座部分の制作について、東北芸術文化学会第65回研究例会、2014年2月22日、弘前大学

三浦俊一、津軽地方の「人形ねぶた」と中国・台湾の「花燈」の制作技法の比較分析、東北芸術文化学会第67回研究例会、2015年2月21日、弘前大学

三浦俊一、中国・台湾の「花燈」制作技法における防水加工技術の分析、東北芸術文化学会第21回大会、2015年7月4日、宮城県仙台市アエル

三浦俊一、発光する立体造形の特性について、東北芸術文化学会第69回研究例会、2016年2月27日、弘前大学

〔図書〕(計 2件)

三浦俊一、弘前ねぶた参加団体協議会、組ねぶたを見直そう、2016、69

三浦俊一、ミネルヴァ書房、都市祭礼文化とソーシャル・キャピタル(仮題)、2016、20

〔その他〕

ホームページ等

<http://hissatsu.neputanin.com/>

<http://neputa.jp/>

いずれも研究代表者の作家名である中川俊一という氏名を用いている。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦俊一 (MIURA, Syunichi)

弘前大学・大学院地域社会研究科・客員研究員

研究者番号：30633143